

初發嘉州 宋蘇軾 五言排律 嘉祐四年（一〇五九年）二十四歳の作

1 朝發鼓闐闐 あした 朝に発せしとき 鼓は闐闐

2 西風獵畫旃 がせん 西風に獵をかしぬ

3 故郷飄已遠 ひよう 故郷は飄として已に遠く

4 往意浩無邊 おうい 往意は浩として辺り無し

5 錦水細不見 きんすい 錦水の細やかなるは見えず

6 蠻江清可憐 ばんこう 蠻江の清かなるは憐む可し

7 奔騰過佛脚 ほんとう 奔騰して仏脚を過ぎ

8 曠蕩造平川 こうとう 曠蕩して平川に造る

9 野市有禪客 やし 野市に禪客有り

10 釣臺尋暮煙 ちようだい 釣台に暮煙を尋ぬ

11 相期定先到 あいき 相期す定めて先づ到るを

12 久立水潺潺 くしく立つ 水の潺潺たるに

※是日期郷僧宗一 會別釣魚臺下 是の日郷僧宗一と釣魚台下に會別せんことを期す

【語釈】初……したばかり。嘉州…四川省樂山県。獵…震いうごかす。畫旃…旃は旗。
 往意…旅の門出にはやる心。錦水…岷江。岷山の山間を流れて、成都のあたりは錦の産地で、錦を洗うので錦水または錦江という。蠻江…青衣江。平羌江ともいう。樂山県（嘉州）で大渡河と合流して岷江に流入する。可憐…愛惜の情をあらわす。禪客…客は故郷を離れている人。自注にみえる眉山県の僧の宗一。

【通釈】 あさまだき 嘉州を出帆したとき、ふなでを告げる鼓の音は デンデンとひびき、なにか絵の描かれている旗がしきりに強い西風にはためいていた。故郷、眉山県がいつしかもう はるかなたになつたさみしさにひきかえ、ゆくてに抱く夢はいよいよはてしなく広がってゆく。故郷の川、あの細やかな錦水の面影は、ここでは見るべくもな
 いが、蛮夷の地に源を発して来る川、青衣江の清らかな流れにも親しみもてた。舟はとびあがらんばかりになってたちまち弥勒の像の足もとを過ぎ、いつしかひろびろした平らかな川に出ている。このあたりのいなかまちに 故郷の禅僧が住んでいるので、日暮がた釣魚台に寄って、ちよつと会ってゆくことになっている。きつとおくれないように行っていてお待ちしますよと言って来ていることとて、もう長いあいだ、ひたたと波のよせるみぎわに立ちつくしていることであろう。
 「蘇軾」近藤光男より抄出

嘉祐四年（一〇五九年）二十四歳

渝州ゆしゅう（今の四川省重慶）より涪州じゅうけい（四川省涪陵県）へ下る江上での作

江上看山

江上にて山を看る

宋・蘇軾

1 船上看山如走馬

船上山を看れば走馬そうばの如く

2 倏忽過去數百羣

倏忽しゅくこつとして過ぎ去る數百ぐん羣

3 前山槎牙忽變態

前山は槎牙さがとして忽たちまち態たいを變じ

4 後嶺雜沓如驚奔

後嶺は雜沓こうれい ざつとうして驚奔きょうほんするが如し

5 仰看微徑斜繚繞

仰びけいいで微徑びけいを看れば斜りょうめに繚繞りょうりょうたり

6 上有行人高縹緲

上こうじんに行人こうじん有り高たかうして縹緲ひょうびょうたり

7 舟中舉手欲與言

舟中手あを舉あげて与ともに言いはんと欲いすれど

8 孤帆南去如飛鳥

孤帆こはん南こに去こつて飛鳥この如こし

【語釈】 江上：長江（揚子江）の水上。 倏忽：あまりに速くとらえようもないさま。 槎牙：でこぼこのさま。 繚繞：繚も繞もめぐる。 縹緲：はるかなさま。

【通釈】 船の上から見る山は駆ける馬のようだ。たちまち過ぎゆく数百のむれ。ゆくてのかどだった山はみるまにかたちを変え、うしろにこみあった峰々は驚きにげまどうものよう。仰ぎみれば、山肌にななめにまつわる小みちのうえはるかに、人かげがかすんで見える。船の中から手を上げて呼ぼうとしたが、風をはらんだ帆は飛鳥のように船を南へ飛ばしてしまった。

「蘇軾」近藤光男より抄出